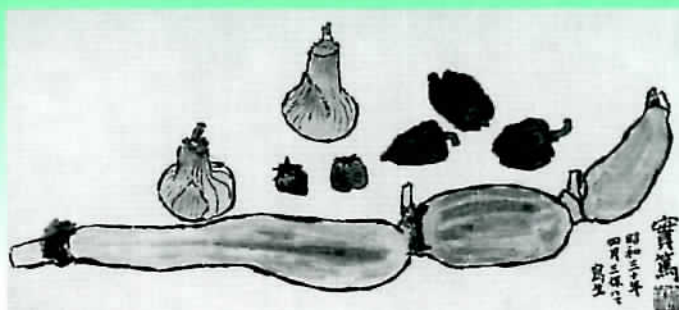




自画像 昭和15~25年



野菜図 昭和30年

三 大切な個性・本当の個性

人が立派な仕事をするために、大切なのは“個性”ですが、その個性について実篤は次のように述べています。

「個性を生かしきったとき、その人は自然から自己にあたえられたものを全部的に生かしたことを意味する。それは同時にその人が人間として不滅な仕事をしたことを意味する。

個性という言葉にひっかかっているものは、個性という点、何か他人と変っている必要があり、その変っている点だけをとり出して個性といている人があるが、僕のいう個性は、そんなけちなものではない。僕のいう個性は、その人の全生命のあらわれというのである。その人の全精神といてもいい。

：他人の仕事と何か変った仕事をして、得意になつてゐる人は、自分の生命に忠実な人とはいえない。

：見かけは他人と似ているものでも個性が生きている場合もありうるし、他人とまるでちがったものをかいても、個性の生きていないつまらぬものがあるのだ。」

（「画をかく喜び」より）

四 あたりまえの事こそ大切

「僕はあたりまえの事きり言いたくない。今の人はあたりまえのことを知らなすぎる。何でも一つひねくらないと承知しない。糸巻から糸を出すように喋るのでは我慢が出来ない。わざと糸をこんがらかして、その糸をほどこく競争をしているようなものだ。あたりまえでないことを尤もらしく言うのと、わけがわからないので感心する。こう言う人間が今は多すぎる。僕はそんな面倒なことをする興味は持っていない。」



手と筆・視 昭和37年ころ

これは、実篤が六十歳代の半ばに書いた小説「真理先生」の中に出て来る文章です。「なーんだ、そんなありふれた考え、くだらないよ。」と、すっかり考えもせずと思ひこむ軽率さを戒めているのです。

もっと知りたい 武者小路実篤

みんな元気に生きよう

武者小路実篤は、晩年になって、「一人の男」という長編の自伝小説を書きました。その中で彼は「文筆の仕事、画をかく仕事、新しき村の仕事、この三つの仕事をする事で、僕は生き甲斐を感じている。」と述べています。実篤は、この三つの仕事を通して、人々に向かって、「みんな人間らしく、元気に、せいっぱい生きよう。」と絶えず呼びかけていたのです。

一 生きる目的

昭和十三年、岩波書店の岩波茂雄氏の依頼で、五十三歳の実篤は「人生論」を書きまし



「人生の旅人に幸あれ」 昭和47年

た。その文章の中に、次のような一節があります。

「人間は何かしに生まれたものだ。何にもしない為に生まれたのではない。それなら何をしたらいいか。それは自己を完全に生かすように努力することと、隣人の為につくすことである。人間はまだ正しく生きる事が中々出来ない境遇にいる。それを段々よくして人間全体が人間らしく生きられるように骨折ることを我等は命じられているのだ。」

二 自分を生かす

人間が正しい目的を持って元気に生きることが、自然の意志にかなうことだと実篤は言います。また、こんな詩もつくりました。

こぶし 昭和35〜40年



友達の喜び

友達と話して、話がはずんで来て、二人の心が、びったり、びったり、あつて、自つと涙ぐむ時、人は何者かにふれるのだ、何者かに。

〔白樺〕大正6年10月号より

だるま 昭和49年



どるまは盛水が動かない 八十九歳 実篤画

自分を本当に生かす

自分を本当に生かすと言う事は利己主義では出来ない、自分の本心を生かす事を意味する。自分の本心を生かす事は他人の本心を生かす事と矛盾はしない、両方が本心を生かせばお互いに愛しあい、賛嘆出来るのが人間だ、私はそれを信じている。だから私は皆が正直に自分を生かす事を賛美するのだ。

〔この道〕昭和41年6月号より